

滑川市早月加積地区／清流の里めぐり 2014年8月19日

7. 親鸞の伝説



■宗派超え講堂む

「真宗王国」とも呼ばれる富山県には、その信仰心のあつさを物語るように親鸞の伝説が各地に残る。滑川市追分にその一つがある。

「立ち往生していた親鸞聖人を、石塚孫七という方がお助けしたんだそうです」

7月下旬、追分の「追分会館」。地元の歴史に詳しい農業、村中清信さん（70）が古い資料を広げながら話す。

鎌倉時代の承元元（1207）年、親鸞は朝廷から念仏停止を命じられ、越後（現新

瀧県)へ流罪の身となったとされる。言い伝えでは、京都を出発して追分村まで来たところで、流れが速い早月川の支流・泥の木川を渡れず、石に座って先を案じていた。

困った親鸞を助けたのが村の農家、石塚孫七だった。親鸞に宿を提供し、翌日おぶつて川を渡った。感激した親鸞は、難なく川を越えた孫七を「そなたは馬人(うまびとよ)」とたたえ、南無阿弥陀仏(なむあみだぶつ)の6文字を書いて授けたという。その軸は魚津市の照頭寺に残っている。

「追分の方には腰掛けたという石が残っているんです」

村中さんが説明する。追分会館の近く、海恵寺の横に安置された「親鸞の腰掛け石」だ。40年ほど前の基盤整備の際、町内に散在していた石仏や石碑と共に移された。

その親鸞と孫七をしのんで1924(大正13)年、住民有志が追分親鸞講を始めた。戦争で中断し、戦後の混乱期の48(昭和23)年、平穏を取り戻そうと宗派を超えた町内総ぐるみで再び始まった。

毎年、8月に腰掛け石前で無縁仏を供養する。10月は追分会館で、さまざまな寺から招く住職から講話を受け、1年間に亡くなった人の法要も行う。60~70人が参加する。

「昔から心のよりどころのような集まりでした。以前は近くの四ツ屋や笠木、大島からも人が来られたものです」

村中さんの友人、山本文敏さん(74)が振り返る。戦後の追分親鸞講を始めた故山

本順薫さんの孫だ。

「宗派に関係なく、地域の絆を感じ合う場。未永く続けていきたいと思います」

追分町内会長、島崎和夫さん（67）の言葉に、村中さんと山本さんがうなずいた。

■遠望近信 前田寛人さん（47）横浜市、トランペット奏者

東部小学校の5年生だった時、学校でトランペット隊が結成され、他校の先生に教わりながら練習に励みました。現在、東京フィルハーモニー交響楽団のトランペット奏者を務めていますが、思い返せばこれが原点ですね。

古里には亡き父との思い出もあります。父は釣りが好きで、よく一緒にボートで海に行ったり、早月川でアユを釣ったりしました。山菜採りに行ったことも覚えています。

青春時代を過ごした古里は私にとって大事な存在。帰省するたび、いろんなことを思い出します。（追分出身）